

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23521006

研究課題名(和文)ネパールにおける動物認識の民族・カースト間比較

研究課題名(英文)Comparative study of animal cognitions of Nepal's ethno-caste groups.

研究代表者

橘 健一 (Tachibana, Kenichi)

立命館大学・産業社会学部・非常勤講師

研究者番号：30401425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：ネパールの諸民族・カースト集団における動物認識を調査し、それらに見られる人間/動物の分割線や接点のあり方を明らかにすることを目指した。先住民チェパンにおいてはシカやトラが他者として排除される一方、人間自身にもそれらの力が結びつけられていることを確認した。グルンにおいては昆虫のナナフシが祖先霊として恐れられ、山地ヒンドゥー教徒のあいだではカマキリが死をもたらす存在として忌み嫌われることがわかった。ネワールにおいては虫の様な小さな存在が排除されつつ自己に結びつけられることを、タルーにおいては動物を呼ぶ媒介者が恐怖されていることがわかった。こうした動物認識から、動物の排除と包摂の状況が確認された。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the divisions between humans and animals as well as the connection between them in Nepal's ethno-caste groups.

In the Chepangs, tigers and deer are excluded as others. At the same time, they are connected humans as existences that had power to live. In the Gurungs, stick insects are considered as ancestral spirits. In Parbat Hindus, mantises are considered as ill omens that caused human's death. In the Newars, a suffix for expressing small existence like insects are also used for speaking ill of third person. In the Tharus, intermediaries that bring wild animals to the villages are supposed to be fierce existences. Such animal cognitions show the transformation of human's exclusion of animals as well as connection between animals and humans.

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：ネパール 先住民 動物認識 他者の排除

1. 研究開始当初の背景

近年の文化人類学研究では、表象や言説の政治性や権力性が強調されるようになり、表象行為が孕む排除（あるいは包摂）の問題に焦点が移行してきた。南アジア研究の文脈では、そうした潮流とサバルタン研究が結びつき、歴史から排除されたアウトカースト先住民女性などに対する表象が注目を集めてきた。そうした排除の問題を考えたときに、重要だが、忘れられがちなのは、動物の問題である。

本研究代表者である橘は、ネパールで「未開」の存在として、様々な文脈で排除されてきたチェパン社会を主なフィールドとし調査研究を続けてきた。1989-90年には当該社会における自然環境利用と分配を明らかにし、1995-97年には、神話や儀礼、日常的な言説の調査を行った。そこから、チェパン自らが他者を排除あるいは包摂するのに用いる動物や異民族など多数の他者表象を取り上げ、それぞれの背景世界とそこでの自己のあり方、世界相互の関係について分析した。その過程で、動物のなかでも特にシカトラに対する認識が生死の問題に連続し、人間の存在に大きく関わることを明らかにした。このような動物認識を明らかにすることは、人間と動物との分割線を示すのと同時に、両者の接点を見出すことに繋がる。また、それは人間社会の権力性への更なる理解と、そこから排除された存在を掬い上げる新たな実践としての可能性も持つ。

ただし、これまでの議論では、シカやトラ以外の認識の把握が十分ではなかった。また、動物認識についての聞き取りが長老（男性）からのものが中心だったため、チェパン内部での動物認識の差異を十分に確認してこなかった。さらにチェパン研究の成果を生かし、周辺諸民族・カースト集団との比較の必要性も浮かび上がってきた。本研究ではそうした点を鑑み、チェパン社会における動物認識について、社会内部の社会的地位、ジェンダー、世代、地域などによる差異を考慮し調査を目指すことにした。さらに、研究代表者と分担者との共同作業により、動物認識の民族・カースト集団による差異の調査研究を目指すに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ネパールの先住民であるチェパンやグルンを始めとした諸民族ならびに山地ヒンドゥーの諸カースト集団を対象に、ジェンダー、学歴、世代といった社会的地位や役割、居住地域や生業、宗教など集団内の差異も考慮しつつ、他者的存在としての動物、特に直接的な接触を持つ動物に対する具体的な認識のあり方を、ネパール東部、中部、および西部でのフィールドワークから明らかにすることである。

また、同時に動物認識の当該集団内、集

団間の比較を行うことで、動物認識が民族、ジェンダー、学歴、世代など社会状況に応じて変化、あるいは変換される状況を示し、そこから動物排除と共生の多様性、動物認識の差異生成の社会的機序、動物認識の差異に横たわる不変性の把握を試みる。

そうしたネパール諸民族・カーストにおける動物認識の理解、把握により、最終的には、他者としての動物のみならず、他者一般に対する排除と共生のあり方の構造的理解に貢献することを目指す。それらに付随して、動物認識論一般への理論的貢献も目指す。まず、従来の民俗学、民族分類学や構造主義などによる動物認識論の問題点や可能性を整理する。そのうえで、近年の環境認識論や人間動物学など最新の動向を踏まえつつ、動物認識論の新たな調査研究法を探求する。

3. 研究の方法

(平成23年度)

代表者（橘）と分担者（渡辺）は、国内で定期的に会合を開き、文献研究の成果と調査分析のアイデアの共有を図った。代表者は、中部ネパールにて動物認識の調査を実施し、昆虫も含めたチェパン社会の動物相を映像機器等で記録、あるいは語り以外にも絵を描いてもらうなど現地の人々自身による映像記録も促した上で、映像資料や実物の小動物を提示し、聞き取り調査をおこなった。聞き取りは、シカ、トラ、イノシシ、コウモリや野鳥など狩猟に関わる動物に対する認識、ブタ、ウシ、ヤギ、ニワトリ、イヌ等の家畜、身近な昆虫などについての語りを、ジェンダーや社会的地位、世代、学歴等に留意しつつ実施した。

さらに、低地の先住民であるタルーの調査も開始し、村落内での動物との接触の概要を把握した。

また、カトマンズで、ネワールとパルバテ・ヒンドゥーでも聞き取り調査を実施した。さらに、チェパン研究の第一人者であるガネシュマン・グルン博士に面談し、チェパン、グルンの動物認識に関わるアドヴァイスを受けた。

分担者（渡辺）は、同時期に約一ヶ月間東ネパールに滞在し、代表者同様の手法で、グルンの移牧の対象となるヒツジや他の家畜、放牧地で触れる動物などを中心に調査を展開した。

また、西ネパールのグルン社会で代表者、分担者のふたり共同で、動物認識に関するフィールドワークを実施した。また、日本ならびにカトマンズで、文献蒐集を行った。

(平成24年度)

国内では、前年度に引き続き、定期的に会合を開き、文献研究の成果と調査分析のアイデアの共有をおこない、さらに前年度の調査を振り返って、調査項目や調査方法の詳細を再検討した。

代表者は、チェパンに加えてタルー社会での調査、分担者は、牧畜・交易民であるグルンを中心に調査を行った。また、カトマンズ、トリブヴァン大学のウダエ・ライ教授、ネパールチェパン協会役員と面談し、アドヴァイスを受けた。

24年度も、23年度同様、ネパールでのフィールドワーク期間中、代表者と分担者間で議論の擦り合わせをおこない、カトマンズでは文献調査、調査結果の討論を行った。また、その他にも国内外で学会発表を行い、投稿論文を執筆した。

(平成25年度)

最終年度も国内では、引き続き、代表者と分担者とで定期的に会合を開き、文献研究の成果と調査分析のアイデアの共有をおこない、全体のまとめに向けた議論を行った。

当初、ネパールで夏季のフィールドワークを計画していたが、8月に国際人類学会がマンチェスター大学で開催されたため予定を変更し、それまでの成果を発表した。学会では、主にアマゾン先住民の文化研究者たちと討論し、アメリカ大陸とアジア大陸との動物認識の同一性や差異についての理解を深めた。

分担者は、ネパール、カトマンズで調査を実施し、牧畜や畜産に関わる業者に対し、聞き取り調査をおこなった。

それぞれの調査全体をまとめた後、最終討議を行い、調査結果の発表と報告書の作成について、意見交換を行った。

他の国内外の学会でも成果を発表し、現在投稿論文を執筆中である。また、ネパールの出版社と、成果の印刷について打ち合わせている。

4. 研究成果

(1) フィールドワークによる成果

本研究の実施以前は、先住民チェパンにおいて、人間存在を捕食の対象であるシカと人間を捕食するトラの中間に位置するものとして捉えていた。

本研究のチェパン社会でのフィールドワークにより、シカは単に捕食の対象として捉えられるだけでなく、人間の生に連続する存在として捉えられていることがわかった。シカの語幹である *sya* が共通する語彙 (*syaksa* 「生きる」「飼う」の意、*syahasa* 「踊る」の意) には「前を逃げていく」というニュアンスが含まれることを、インフォーマントより確認できた。また、トラについても、人間の身体内部にもトラが存在し、人間の寿命を左右したり、シャックリの原因になったりすると考えられていること、さらに死後にそれが肉体から抜け出してくると考えられていること、亡くなった人について語る際、その人の名前の後にトラ (*ja*) を接尾辞として付けることが明らかになった。また、コウモリ *win* と売買 *winsa* という単語の語幹が共通し、どちらも、人間の前を行き来する点で共通して

いると考えられることも確認することができた。コウモリを呼ぶためにシャーマンが歌を謡うことも、フィールドワークで明らかにできた。

虫は、チェパン社会で、地を這う虫と飛翔する虫とに大きく分類され、飛翔する虫がしばしば魂の象徴として捉えられる一方で、地を這う虫が体内に入ると死をもたらすと考えられていることもフィールドワークによりわかった。生物の分類の一部が、こうした存在論的な認識と関わっていることを確認できた。

このような動物認識一般は、ジェンダー間、世代間で、大きな違いは認められず、動物認識が日常の中で広く伝承されていることがわかった。一方で、鳥についての聞き取り調査から、学歴が比較的高い人たちの認識が若干異なることを確認できた。それらの鳥は、学校教科書にも登場していることから、学校教育の動物認識への影響の大きさを伺うことができた。

野生動物以外にも、家畜であるヤギやウシ、ブタに関する認識も調査した。ほとんどの家畜に対し、チェパン語で呼びかけられるが、ウシ(役牛)への呼びかけはネパール語でなされることがわかった。これは、ウシ飼養の歴史の浅さとの関わりが考えられる。他方、婚資に使われるブタは、子ブタと親ブタとでチェパン語での呼びかけ方が違い、また、婚資のブタが解体される際に、その身体部位が、嫁の身体に喩えられることもわかった。

その他の民族についても、生死や人間存在に関わる独自の解釈がなされる動物について、重点的に聞き取り調査を実施した。グルンにおいては昆虫のナナフシが祖先霊として恐れられ、家のなかには入れないように注意されることを確認した。

山地ヒンドゥー教徒のあいだでは、カマキリが身体に触れると死をもたらすとして忌み嫌われることがわかった。

ネワールにおいては、虫や猫のような小さな存在に対し、*ca* という接尾辞が当てられ、しばしば、これが人にも応用されることを見出した。会話に参加していない第三者の名前の後に、この *ca* を付け加える。これには、第三者を揶揄したり、排除する意味があるが、同時に、愛称のようなニュアンスもそこに加わるとされる。小さな取るに足らない存在性が愛する対象として受け入れられる状況が確認できた。

タルーにおいては狩猟の際、野生動物を村の近くまで呼び寄せる *sikarimari* という媒介者がかつて存在したことを確認した。地域によりその媒介者を非人間的な存在として追い払ったとしたり、村人同様村内に住まわしていたりと、その存在の詳細に関する解釈の幅は大きい。

これ以外に、分担者は、東ネパールのグルン牧畜民にとっての動物認識を調査し、交易による場所の移動、動物の病、自然災害とい

った状況の変化が動物認識に影響することを見出した。そこからさらに動物に一定の他者性が認められたときに、その他者性をどこまでも獲得、あるいは排除しようとする立場と、比較的容易にその他者性の獲得を諦めたり、目を瞑って消費したりしてしまう立場とがあることを見出した。

(2) 文献調査による成果

文献調査により、チェパンのようなシカやトラを人間の生に結びつけるような認識が、ネパールの他の民族・カーストでは見られないことがわかった。その結果と、ネパールのなかでチェパンが独自性の高い採集狩猟生活を営んできたという事実から、チェパン文化が、他のチベット・ビルマ語系ネパール先住民とは異なる系統にある可能性が見えてきた。さらに、インドのナガでは、チェパンに近いトラに対する認識が見られることを文献調査により確認できた。

理論的には、民俗学者の千葉徳爾の議論、人類学者のブルーノ・ラトゥールやヴィヴェイロス・デ・カストロ、フィリップ・デスコラ、インゴールドらの研究から、多くの示唆を得ることができた。チェパンの動物認識は、ヴィヴェイロス・デ・カストロの論じるアマゾン先住民のパスpekティヴィズムと一部重なることと、アマゾン先住民では動物種ごとに眼差しや世界が異なる多自然主義が見られるが、チェパンの例では地中と地表という対置のなかで両者のあいだに異なる眼差しと世界が構成されている点で異なることを確認した。また、ヴィヴェイロス・デ・カストロの論じるパスpekティヴィズムでは超越性が認められないものの、チェパンのタントリズムにおいては、太陽を中心とした超越性が見られることを確認できた。

(3) 全体的な成果と今後の課題

理論的考察の進展により、研究の対象を、自然を認識する主体の問題に限定するのではなく、主体と認識対象である自然を含んだ「世界」の多層性にまで広げていく必要があることが確認された。また、世界の多層性といったときに問題となる「層」について、自然科学の問題も射程に入れつつ、今後考察を進める必要があることもわかった。

今回の研究により、チェパンの死者に対する表現と、ネワールの第三者に対する表現とのあいだに、不変の構造と変換とが見出されることがわかった。チェパン社会においてトラはその存在が持つ圧倒的力によって排除され、ネワール社会において虫などの小さく些細な存在が排除される。両者は同時に、人間存在の基底として包摂されもする。こうした構造を両者は共有するが、力が全ての人に平等的に配分されているのに対して、小ささは社会的な身分や地位の区分と密接に結びつく、という差異も示す。このような排除されつつ包摂される基底の構造とその変換を見出せたことは、本研究の大きな成果である。

今後は、本研究で対象としたネパールの諸

カースト・民族集団はもとより、日本を含めた他の文化領域における他者認識をさらに追求、調査し、死者や第三者の排除と包摂に関わるような基底的存在についての研究を深めていく必要がある。その際、動物以外にも太陽や宇宙の問題、地中と地表の問題など、世界の「層」に関わる領域も広く扱うことが求められる。

民族文化の歴史研究としては、ナガなどネパール以外の近隣諸国のチベット・ビルマ語系諸民族の資料収集を続け、ネパール先住民とそうした諸民族との歴史的な連続性と非連続性について調査を継続することが重要な課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

R P Parajuli, T Fujiwara, M Umezaki, S Konishi, E Takane, M Maharjan, K Tachibana, H W Jiang, K Pahari, C Watanabe. Prevalence and risk factors of soil-transmitted helminth infection in Nepal. *Transactions of the Royal Society of Tropical Medicine and Hygiene* 108(4). pp. 228-236. 2014; DOI: 10.1093/trstmh/tru013. (査読あり)

Shoko Konishi, Rajendra Prasad Parajuli, Erica Takane, Makhan Maharjan, Kenichi Tachibana, Hong-Wei Jiang, Krishna Pahari, Yosuke Inoue, Masahiro Umezaki, Chiho Watanabe. Significant sex difference in the association between C-reactive protein concentration and anthropometry among 13- to 19-year olds, but not 6- to 12-year olds in Nepal. *American Journal of Physical Anthropology* 154(1). pp. 42-51. 2014; DOI: 10.1002/ajpa.22470. (査読あり)

Watanabe, Kazuyuki. 2011 Land Use History of Grazing Pastures: A case of Himalayan transhumant sheep herders. The Oxford-Nagoya Environment Seminar: The Environmental Histories of Europe and Japan. Nagoya University, Nagoya, JAPAN. pp. 127-147. 2011. (査読なし)

[学会発表](計31件)

渡辺和之「原発事故による畜産被害：福島県相馬市東玉野地区副霊山集落の例」日本地理学会、2014年3月27日、国土館大学(東京都世田谷区)。

渡辺和之「東ネパール・サガルマータ県における定期市の変化：北インドと比較して」現代インド研究 HINDAS 研究会、2014年1月25日、広島大学(広島県東広島市)。

Kenichi Tachibana, Changes of the socio-political constellation in Chepang society in the days of democracy. SASON

conference, 2013 Dec 16, NTNC, Lalitpur (ネパール).

橋健一「チェパンの「社会的包摂」と不安-多自然・多民族・個人-」、国立民族学博物館共同研究「ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」、2013年10月19日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)。

渡辺和之「村落の維持機構としての家畜飼養:ネパールの事例から」日本地理学会現代インド研究グループ、2013年9月28日、福島大学(福島県福島市)。

渡辺和之「原発事故による畜産被害:福島県伊達市霊山町の事例から」日本地理学会、2013年9月28日、福島大学(福島県福島市)。

渡辺和之「ネパール東部高地における畜産物交易:ソルクンブー郡の事例から」(ポスター発表)日本地理学会、2013年9月28日-29日、福島大学(福島県福島市)。

Kazuyuki Watanabe, Who continues the weaving of woolen rug?: A case of the village of sheep herders of East Nepal. IUAS International Conference, 2013 Aug 7, University of Manchester (イギリス)。

Kenichi Tachibana, Perspectivism between/through deer and tigers: Prey/predator relations and the concept of souls in Chepang of Nepal. IUAS International Conference, 2013 Aug 7, University of Manchester (イギリス)。

Kazuyuki Watanabe. Where is the temporary storage site of radio-active residues? A case of Ryozen town, Date city, Fukushima Prefecture, Japan. The 14th Global Conference of the International Association for the Study of the Commons. 2013 June 5, Kitafuji (静岡県富士宮市)。

Kazuyuki Watanabe. Changing relationships of access to pastures: How Nepalese sheep herders negotiate on their migration routes? Panel: Mobility and Pastoral land management in Asia and Africa. The 14th Global Conference of the International Association for the Study of the Commons, 2013 June 4, Kitafuji (静岡県富士宮市)。

橋健一、「ネパールの「民謡」をめぐる景観について-音楽の変換と流通のかたち-」、国立民族学博物館共同研究「グローバル化の中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」2013年5月18日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)。

渡辺和之「チベット難民キャンプにおける絨毯産業の盛衰。東ネパール・ソルクンブー郡チャルサの事例(ポスター発表)日本地理学会、2013年3月29日、立正大学(東京都品川区)。

渡辺和之「ヤギとブタ。トライブや低カーストはどちらを好むのか?東ネパールにお

ける農民の家畜飼養と交易」日本地理学会、2013年3月29日、立正大学(東京都品川区)。

渡辺和之「村に残った人々の暮らしはどう変わったのか?東ネパール、ルムジャタル村における家畜頭数、耕作地、村落開発委員会における女性とグリットの役割の変化」国立民族学博物館共同研究「ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」2013年1月12日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)。

Kazuyuki Watanabe. Changing Use of Pastures: A case study of the sheep herders of East Nepal. International Symposium Changing Mountain Environments in Asia. Tribhuvan University and Hokkaido University. 9, October, 2012 at Hotel Himalaya (ネパール)。

橋健一、「ネパール先住民チェパンの動物認識における『観点主義』と『多自然主義』」、第25回日本南アジア学会全国大会、2012年10月6日、東京外国語大学(東京都府中市)。

Kazuyuki Watanabe. Tales of my aunts: Living with radiation in Fukushima Prefecture. ZELF. 2 September, 2012. Freie Universitat Berlin (ドイツ)。

Kazuyuki Watanabe. Himalayan pastures are overgrown on this side: Land use history of Nepalese transhumant sheep herders. International Geographical Congress: 29 August, 2012, at the Universitat zu Koln (ドイツ)。

渡辺和之「ネパールにおける家畜・家禽の伝染病被害と個体の回復過程」生物文化誌学会、2012年7月14日、福岡リーセントホテル(福岡県福岡市)。

②橋健一、「呼ぶと応える動物たち-ネパール先住民チェパンにおける魚、風、コウモリとムシ」、生き物文化誌学会第10回学術大会、2012年7月14日、福岡リーセントホテル(福岡県福岡市)。

②渡辺和之「ネパール・ヒマラヤにおける山地社会の変化と羊飼いの現在」国際山岳年プラス10シンポジウム、2012年6月23日、日本大学(東京都世田谷区)。

③渡辺和之「コメント:災害常襲地の歴史人口と人口変化:山岳地域の環境と災害を例に」人口学会、2012年6月3日、東京大学(東京都目黒区)。

④渡辺和之「タライ調査報告:ネパール・ルンビニに在来ブタを訪ねる」熱帯家畜利用研究会。2012年3月17日、奥州市牛の博物館(岩手県奥州市)。

⑤渡辺和之「山地の家畜と平地の家畜」『シンポジウム:モンスーンアジアの家畜飼養を考える』2012年3月17日、奥州市牛の博物館(岩手県奥州市)。

⑥渡辺和之「羊毛織物ラリを織り続ける人々」日本地理学会、2012年3月29日、首都大学東京(東京都八王子市)。

⑦渡辺和之「ネパール・ヒマラヤにおける

山地社会の変化と羊飼いの現在」(招待講演) 国際山岳年プラス 10 シンポジウム、2012 年 6 月 23 日、日本大学(東京都世田谷区)。

²⁸ 橋健一「ネパール中間山地先住民における狩猟採集と動物解釈」生き物文化誌学会第 9 回学術大会、2011 年 11 月 12 日、東京農業大学(東京都世田谷区)。

²⁹ 渡辺和之「東ネパール山村における羊・山羊の伝染病被害」生き物文化誌学会、2011 年 11 月 12 日、東京農業大学(東京都世田谷区)。

³⁰ Kazuyuki Watanabe. Land Use History and Periodical Market: Rural-Urban Relationships among Wajima of Ishikawa prefecture, Japan (1989-2011). Conference of East Asian Environment History Association. 2011 Oct 26, Chuou Kenkyuin, Taipei (台湾)。

³¹ 渡辺和之「観光化と地元の野菜売り：石川県輪島の朝市に見る都市＝農村関係の変化(1989-2011年)」日本地理学会、2011 年 9 月 16 日、大分大学(大分県大分市)。

〔図書〕(計 4 件)

渡辺和之「移動のタイプとその変化：東ネパールの事例から」宮本真二・野中健一(編)『自然と人間の環境史』(ネイチャー・アンド・ソサイエティー研究第 1 巻)海青社、2014 年、117-149 頁。

渡辺和之「ネパール・ヒマラヤにおける山地社会の変化と羊飼いの現在」国際山岳年プラス 10 実行委員会(編)『国際山岳年プラス 10 シンポジウム 2012 年研究集会報告書：みんなで山を考えよう』国際山岳年プラス 10 実行委員会。2013 年、37-42 頁。

渡辺和之「ローカル・コモンズから森林利用者組織へ：東ネパールの羊飼いにみる放牧地確保の戦術」横山智(編)『資源と生業の地理学』(ネイチャー・アンド・ソサイエティー研究第 4 巻)海青社、2013 年、271-293 頁。

橋健一、「ネパール-空間構造と認識-」、立川武蔵、杉本良男、海津正倫編、『朝倉世界地理講座 4-大地と人間の物語 南アジア』、朝倉書店、2012 年、265-80 頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

渡辺和之 2014 「書評横山智・荒木一視・松本淳(編著)『モンスーンアジアのフードと風土』明石書店 2012 年 p.260. ISBN987-4-750-33661-9」『広島大学現代インド研究：空間と社会』4: 55-57 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋 健一(Kenichi, Tachibana)

所属：立命館大学・産業社会学部・非常勤講師

研究者番号：30401245

(2) 研究分担者

渡辺 和之(Kazuyuki, Watanabe)

所属：立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：40469185

(3) 連携研究者

()

研究者番号：